別紙

■出展アーティスト（五十音順、敬称略）

栗林隆



1968 年生まれ、長崎県出身。 1990 年代初頭よりドイツに滞在し、以後一貫して「境界」を主題に、ドローイング、インスタレーション、映像など多様なメディアを用いて制作を行ってきた。東西分断後のドイツでの経験を背景に、自然と人間、可視と不可視、陸と水、内と外といった複数の境界面に着目し、鑑賞者の身体感覚を喚起する作品を国内外で発表している。近年は日本とインドネシアを往復しながら活動し、土地の歴史や環境、エネルギーをめぐる主題を扱うプロジェクトを展開。イスラミックアート・ビエンナーレ（ジッダ サウジアラビア 2025）、個展 「Roots」（神奈川県立近代美術館 葉山 2024）、六本木アートナイト（六本木ヒルズ 2023）、ドクメンタ 15（カッセル ドイツ 2022）、瀬戸内国際芸術祭（香川県 伊吹島 2019）、「Enfance／こども時代」展（パレ・ド・トーキョー　パリ 2018）、個展「Water>|<Wasser」（十和田市現代美術館 2012）、「ネイチャー・センス展」（森美術館 2010）など多数。近作では《元気炉》シリーズや《Tanker Project》を通して、自然環境と社会構造の関係を批評的かつ詩的に提示している。



栗林隆《元気炉一六号基 大谷》

佐々木類



1984 年高知県生まれ。2006 年武蔵野美術大学卒業、2010 年ロードアイランドスクールオブデザイン大学院修士課程修了。身近にある自然や生活環境にインスピレーションを得ながら、主に保存や記録が可能な素材であるガラスを用い、自分が存在する場所で知覚した「微かな懐かしさ」のありようを探求している。北欧やアメリカを中心に滞在制作招聘を受け、国内外の美術館で展示活動を行う。主な賞歴は、第 33 回 Rakow Commission 2018(2019 年、コーニングガラス美術館 /アメリカ)、富山ガラス大賞展 2021 大賞(2021 年、富山市ガラス美術館)。ノルウェー国立美術館(ノルウェー)、金沢 21 世紀美術館、国立工芸館などに作品収蔵多数。近年の主な展示は「国際芸術祭あいち 2025」、また個展「Subtle Intimacy : Here and There」（2023 年、ポートランド日本庭園 / アメリカ）に参加。ニューヨークタイムズ紙などで作家特集掲載。現在は、石川県を拠点とする。



佐々木類《Self-Container No.1》

横手太紀



1998 年生まれ。神奈川県逗子市育ち。2021 年東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。2025 年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。 横手太紀の実践は、身の回りの景色や出来事によって揺さぶられる感情から始まる。存在と不在、非言語的なやりとり、目では捉えきれない微細な存在や事象。横手は物質とその背後にある見えない交感に目を向け、それらを丁寧な眼差しによって、集合体のなかに埋もれた個の存在や、多様な時間の流れを浮かび上がらせる。人間と非人間、現在と記憶、現実と想像が自然と同じ場に流れるなかで、そうした他者との静かな共鳴は、そのあわい※へ目を向ける態度であり、私たちと社会や世界とのより深い接続を促すものである。 主な展覧会に、to make today lovely, too / to make today lonely, too (CON_＋parcel、東京 2026)、Minor Attractions 2025 (The Mandrake Hotel、ロンドン 2025)、Frieze Seoul 2025（COEX、ソウル 2025）、BOLMETEUS（SAI、東京 2024）、until soil unites（CON_、東京 2024）、六甲ミーツ・アート 2023 beyond（六甲山、兵庫 2023）、even a worm will turn (parcel、東京 2022)、惑星ザムザ(小高製本工業跡地、東京 2022)など多数。
※あわい…物と物のあいだ。また，あいだの距離。



横手太紀《Moku/ Floating Rubble (when the cat's away, the mice will play)》Photo by Jungwoo Lee

■ディレクター

永山祐子



1975 年東京生まれ。1998 年～2002 年 青木淳建築計画事務所勤務。2002 年永山祐子建築設計設立。2020 年～2024 年、武蔵野美術大学客員教授。2023 年～2025 年、グッドデザイン賞審査副委員長。主な仕事に「LOUIS VUITTON 大丸京都店」、「丘のある家」、「豊島横尾館（美術館）」、「女神の森セントラルガーデン（小淵沢のホール・複合施設）」「ドバイ国際博覧会日本館」、「玉川髙島屋 S.C. 本館 1F グランパティオ」、「JINS PARK 前橋」、「膜屋根のいえ」、「東急歌舞伎町タワー」、大阪・関西万博「ウーマンズパビリオン in collaboration with Cartier」、パナソニックグループパビリオン「ノモの国」など。ロレアル賞奨励賞、JCD デザイン賞奨励賞（2005）、AR Awards 優秀賞（2006／「丘のある家」）、Architectural Record Design Vanguard（2012）、JIA 新人賞（2014／「豊島横尾館」）、山梨県建築文化賞、JCD デザイン賞銀賞（2017）、東京建築賞優秀賞（2018／「女神の森セントラルガーデン」）、照明学会 照明デザイン賞 最優秀賞（2021／「玉川髙島屋 S.C. 本館 1F グランパティオ」）、World Architecture Festival 2022 Highly
Commended（2022）、iF Design Award Winner（2023 年「JINS PARK 前橋」および 2026 年「AOI CELESTIE COFFEE ROASTERY」）、第 76 回芸術選奨文部科学大臣新人賞（美術 B 部門） など受賞。現在、東京駅前常盤橋プロジェクト「TOKYO TORCH Torch Tower」などの計画が進行中。著書に『建築から物語を紡ぐ』（グラフィック社）、『建築というきっかけ』（集英社新書）がある。

■キュレトリアルコラボレーター

丹原健翔



作家、キュレーター。1992 年東京生まれ。ハーバード大学美術史学科卒業。現代におけるコミュニティの通過儀礼や儀式についてパフォーマンスを中心にボストンで作家活動をしたのち、2017 年に帰国、国内で作家・キュレーターとして活動。サイトスペシフィックな作品や展示を中心に、鑑賞者のまなざしの変化を誘発することを目的に制作。作家・キュレーション活動の他に、これまでにアートスペース「新大久保 UGO」や一般社団法人オープン・アート・コンソーシアムの立ち上げを行う。 その他に「ソノアイダ」プログラムディレクター、東京工芸大学非常勤講師など。主な展覧会に Meta Fair #01 (2022 年、ソノアイダ#新有楽町、企画・運営・キュレーション）、「デバッグの情景」（2022 年、ANB Tokyo、キュレーション）、「無人のアーク」（Study: 大阪関西国際芸術祭 2023、キュレーション）、「Back to Thread / 糸への回帰」（FUJI TEXTILE WEEK 2023、山梨）、「竹中工務店展：たてもののめがね まちめがね展 宇宙から虫まで、縮尺で考える建築の見方」（2025 年、VS.、大阪）など。